

## 日本一有名なカバ物語

アニマルフォトグラファー  
トラベルライター

平 岩 雅 代

カバはアフリカのサハラ砂漠以南の川、湖、沼などに住んでいます。

陸上に暮らす動物の中では、ゾウに次ぐ大きさで、平均体重は3~4トンに達します。

一日のうちの大半を水の中で過ごすカバには、水の中の生活に順応できる身体的特徴が備わっています。

たとえば、カバの皮膚の厚さは数センチもあり、さらにその下に5センチ程の脂肪が付いています。カバの耳と鼻は、水の中ではピタリとブタをすることができるのです。指の間には水かき状のものも付いています。

私はこの27年間に、ケニアとタンザニアの各地で数多くの野生のカバを見てきました。不思議なもので、カバには他の野生動物にはない、一種独特の魅力を感じます。



写真1 岸辺のカバは、つきたての餅のように寝そべる (マサイマラで撮影)

ライオンやゾウに比べると決して強そうでも格好良くもないカバですが、「カバが大好き」という人は、意外に少なくありません。

日本各地の動物園でも人気者のカバですが、現在、日本全国の動物園や、サファリパークなどで飼育されているカバのルーツが、実はケニアにあったことを、ご存知ですか？

戦後初めてケニアから日本にやって来て、「重吉」と名付けられ、名古屋の東山動物園で大往生したカバ。テレビ番組や書籍にも度々採り上げられた有名なカバです。

重吉は1952年、当時東京の上野動物園で飼育課企画係長だった故・林寿郎氏によって日本に連れて来られました。

ケニアの首都ナイロビから北へ50キロほどの、野生のカバの生息地ジュジャで捕獲された三頭の子カバのうちの一頭です。

重吉は40日以上長い船旅にも耐え、名古屋の東山動物園に落ち着きました。来園時に付けられた名前は「かば太郎」といいました。

1954年に東山動物園は、ドイツのハーゲンバック動物園からメスのカバを購入、10月には前代未聞のカバの結婚式が催されることになり、新郎は「かば太郎」から「重吉」と改め、新婦は「福子」と名付けられました。



写真2 子カバは水中でも活発に動く  
(ンゴロンゴロで撮影)

名古屋商工祭のイベントのひとつとして企画されたこの結婚式には、トラック三台の嫁入り行列が続き、名古屋の繁華街である広小路、栄、大須を練り歩いた、という記録が残っています。

多くの人々から祝福された重吉と福子夫妻は、結婚三年目の1957年に長女を出産、新聞記事にもなりました。

以来、夫妻の間には次々に子が生まれ、二世、三世は言うまでもなく、四世、そして五世(玄孫)までが、国内外の動物園で飼育されています。

日本国内の動物園で暮らすカバの半分以上は重吉と福子の血縁で、その証拠に母親の福子の足にある白い斑紋が体のどこかに出ているのです。

19頭もの子宝に恵まれた重吉と福子夫妻でしたが、福子が1997年に天寿を全うし、残された重吉も四年後の2001年に大往生を遂げました。ケニアから来日して実に半世紀以上、人間にたとえるならば推定年齢は優に百歳を越えていました。

ちなみに、重吉と共に来日した他の二頭は東京にある上野動物園に落ち着き、オスは「デカオ」、メスは「ザブコ」と名付けら

れて夫妻として飼育されました。来日した翌年の1953年に第一子の「ダイタロー」を、続いて1954年に第二子の「イワオ」を出産しましたが、残念なことに二子ともに生後一年未満で死んでしまいました。

デカオとザブコの間には六頭の子が生まれましたが、国内に現存する子はなく、1960年に生まれた「ナヨコ」が、インディラ・ガンジー首相就任を祝って、インドにあるデリー動物園に贈られました。

ザブコは糖尿病死で世間を騒がせたカバです。デカオはその後、埼玉県東武動物公園に転出。“カバ園長”として知られる西山登志雄氏とともに6月のムシ歯予防デーの“歯みがきカバ”として有名になりました。そして1984年に死ぬまでの32年間に、計五頭のメスとペアリングし、19頭の子を設けました。

1952年に一頭200万円で取引きされていた高価なカバも時代の流れとともに余剰動物としてお荷物となり、次第に引き受ける動物園がなくなり、動物商のカバに対する評価額も20万円を割ってしまいました。そして遂には無償譲渡として処分されるとは寂しいことです。

それにしてもアフリカの大自然の中で暮らすカバたちのほうが、はるかに幸せであることは間違いありません。